

2歳以上 18歳以下の麻疹風しん混合予防接種の説明書

西東京市

◇麻疹（はしか）について

麻疹ウイルスの感染によって起こります。感染力が強く、飛沫・接触だけでなく空気感染もあり、予防接種を受けないと、多くの人がかかり、流行する可能性があります。典型的な麻疹（はしか）は、高熱、せき、鼻汁、眼球結膜の充血、目やに、発疹を主症状とします。最初の3～4日間は38℃前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うと、また、39～40℃の高熱と発疹が出ます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失しますがしばらくは色素沈着が残ります。主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎や脳炎があります。患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は1～6人に合併します。脳炎は約1,000人に1～2人の割合で発生がみられます。また、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は、はしか患者約10万例に1～2例発生します。

◇風しんについて

風しんウイルスの飛沫感染によって起こります。潜伏期間は2～3週間です。典型的な風しんは、軽いかぜ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。発疹も熱も約3日間で治るので「三日ばしか」とも呼ばれることがあります。予後は一般に良好ですが、血小板減少性紫斑病や脳炎の合併を認めることがあり、まれに溶血性貧血もみられます。感染症発生動向調査によれば、平成30年～令和元年の風しんの流行（累計5,247人）で、血小板減少性紫斑病が21人、脳炎が2人報告されました。

大人になってからかかると重症になります。妊婦が妊娠20週頃までにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる先天性の心臓病、白内障、聴力障害や発育発達遅延などの障害をもった児が生まれる可能性が非常に高くなります。

◇麻疹風しん（MR）混合ワクチン（生ワクチン）

麻疹ウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくった生ワクチンです。

1歳になったらなるべく早く第1期の予防接種を受けるように努めてください。

麻疹ワクチンも風しんワクチンも1回の接種で95%以上の子どもは、免疫を得ることができますが、つき損ねた場合の用心と、年数が経って免疫が下がってくることを防ぐ目的で、第2期（2回目）の接種を行います。

第1期、第2期において、麻疹及び風しんの予防接種を同時に行う場合は、麻疹風しん（MR）混合ワクチンを使用することとされています。

また、麻疹又は風しんのいずれかにかかった方にも、麻疹風しん（MR）混合ワクチンを使用することが可能とされています。

なお、ガンマグロブリンの注射を受けたことがあるお子さんについての接種時期については、かかりつけ医と相談してください。

【副反応】

これまでの副反応のデータから、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎やけいれんなどの副反応が、まれに生じる可能性もあります。

また、麻疹ワクチンを接種した場合、発熱に伴う熱性けいれん（約300人に1人）を来すことがあります。その他、ごくまれに脳炎・脳症（100万～150万人に1人以下）の報告があります。

1 対象者

定期接種の対象者を除く 2歳以上 18歳以下の市民

※定期接種の対象年齢は次のとおりです。

第2期…5歳以上7歳未満で小学校就学前の1年間にあるお子さま

(小学校1年生になる前年の4月1日から翌年の3月31日までの1年間)

2 接種方法

指定医療機関での個別接種（予約が必要な場合がありますので、必ず指定医療機関に確認してください。）

3 持ち物

母子健康手帳、記入済みの予診票、予防接種費用

4 自己負担額

麻しん風しん混合（MR）：5,800円

風しん単独ワクチン：4,000円

※生活保護受給世帯、中国残留邦人等支援給付世帯の方が、受給証明書等を医療機関に提出した場合は無料です。

5 他の予防接種との間隔



6 その他

検温は、当日指定医療機関で行います。

<13歳～15歳の方が、1人で接種を受けに行く場合>

保護者がこの説明書の内容を理解し、納得した上で、お子さまに予防接種を受けさせることを希望する場合に、予診票にあらかじめ保護者の方が署名することによって、保護者の同伴なしで予防接種を受けることができます。

当日は、保護者の署名済の予診票と母子健康手帳を必ず持参させてください。

接種の可否を判断する際に、疑問等があれば、事前にかかりつけ医や西東京市健康課（042-438-4021）に確認して、十分納得した上で、検討してください。

なお、被接種者本人が16歳以上の場合には、保護者の同伴も署名も必要ありません。

本人が予診票に署名をすれば接種が可能です。